未生民来（人が生まれる前に）

前有上帝（すでに、上帝がいるのに）

惟一眞神（唯一の眞なる神として）

無聖能比（聖なるもの、その能力を比較するところがない）

李榮が儒教の枠組のなかで儒教の言葉を用いてキリスト教を捉えたことは、東洋思想の伝統的な遺産を再発見すると同時に、新たな神学の方向性を明らかにするものでもあった。そして何より、当時の儒学者たちがキリスト教を理解する際、朝鮮における伝統的な儒教思想を大いに役立てたことが『聖教要旨』から窺えるのである。

朝鮮の人々が、プロテスタントを受容したのは一八八〇年以後である。韓国で行われたプロテスタントの宣教は、単に教会の拡大運動にとどまらず、初めから民衆の啓蒙と生活の改革を目指す文化的運動としての性格が強かった。なかでも、とりわけ婦女子や一般大衆を中心に勢力を伸ばしたのである。なお、その際注目すべきはプロテスタントが、「ハングルの宗教」であったということである。こうしてハングルの宗教、民族の心性を代弁する宗教としてのプロテスタントは、朝鮮半島にかけて復興会（ブフンフェ）をおこなうことにより、民衆の宗教、あるいは民族の宗教として位置づけられていくこととなった。以上、本発表では韓国におけるキリスト教受容の問題を、伝統思想との連関から概観することにより、朝鮮の時代から今日に至るまで、韓国ではキリスト教が時代的な要請にしたがい、積極的・能動的に受容されてきたことを明らかにした。

内村鑑三の武士道

岩野 祐介

本パネルのテーマである、「キリスト教受容の土台としての武士道」という見方を定着させる上で大きな役割をはたした人物の一人が、無教会主義キリスト教の創始者、内村鑑三である。彼は、武士道を台木とし、キリスト教を接ぎ木する、という表現をした。いわば新約に対する旧約としての武士道である。しかし、内村が用いる武士道という表現には、かなりの幅がある。

内村は事実として武士階級出身なのであるから、彼が「自分たちは武士である、武士的である」ということに間違いはない。しかし、武士道的であることと、武士そのものであることとは違う。内村が言う武士的ということとは、封建的（＝特権的）階級意識とは異なるのである。

そこで、本発表では内村鑑三はどのように武士や武士道に言及しているか、ということを確認していく。それがいかにしてキリスト教の台木足り得ると内村が考えていたか、ということも明らかにすれば、それが武士道のキリスト教の問題として指摘される排外的ナショナリズムと自動的・必然的に結合するようなものであるかどうか、も明らかになるであろう。

内村が武士・武士道について言及した箇所を分析すると、主として「何々のでなく武士的」、というパターンで武士・武士

パネル

道を語っている、ということが確認できる。それらは主に、A 様々な現実に対する理想主義的価値観としての武士道、B 西欧的価値観に対する武士道、C 近代主義に対する武士道、D 「愛至上主義」に対する武士道（愛に対する義を強調）、E1（理想的な）日本の世俗的道德徳としての武士道、E2 キリスト教に対する世俗の価値観としての武士道（あくまでも武士道が「人間同士の価値観」にすぎないものであることが示され、信仰の立場からの対象化がなされる）、E3 武士道批判、等である。

内村は武士道の特徴として、正直、高潔、寛大、約束を守ること、借金しないこと、逃げる敵を追わないこと、人が窮地に陥っているのを見て喜ばないこと、等を挙げている。これらは、いずれもパウロが書簡においてキリスト者たちに訴えかけているのと同様な徳目であって、特に武士道に固有の徳目、というものではないように思われる。武士道は戦闘職、ということを意識しているものではない。よって、内村の考える、台木としての武士道が、人間関係を良好に保つ上での一般的な道徳性以上の特別なものではないことが、明らかになったと言えるであろう。少なくとも、日本的固有性ということを、改めてそこから取り出すことは困難であるように思われる。

内村が一方で「平民」という言い方を多くしていることも、見逃してはいけくない。内村の平民観においては、労働、自然、平和がその特徴とされる。彼は、キリスト教は平民的宗教であるとも述べている。すなわち、貴族的・階級的でない、ということである。神殿批判・司祭批判という要素がユダヤ・キリスト教に含まれていることを考えれば、内村の主張は間違っている

いないであろう。

内村が「武士的」ということを重視したのは間違いないことである。しかしその武士的であるという内容が、他の伝統文化と共通するような徳目・道徳性を含むこと、さらに武士というものを独立した人間と捉え、貴族性との違いを強調していることを押さえた上で、その「武士道」ということを評価すべきではないか。さらに、その「武士道」が特別な「日本らしさ」、「日本の固有性」といったことにこだわったものではない、ということは、もっと積極的に考えてもいいのではないであろうか。

『武士道』にみる比較の言説

東馬場 郁生

新渡戸稲造による『武士道』(Bushido) に関して、研究者はしばしば、新渡戸自身によるキリスト教的理解や意味付け、あるいは歴史的「武士道」からの変容を指摘する。しかし、その「変容した」武士道が、同書において実際どのような形になっているか分析したものはあまりない。本発表では、『武士道』における比較の言説に改めて注目し、新渡戸の武士道の形成過程を考察する。

比較については、近年、比較を行う研究者自身の立場や関心が注目されている。比較を支える論理的前提や、研究者自身の